山田町合併50周年記念企画
History of yamada town

大正

◀八幡宮祭りのにぎわい（大正中期） ９月15日の祭りではみこしが渡り、各種の踊りが通る。写真は消防団によるはしご乗りである

◀山田の市日（大正初期） 藩政時代から山田の三日町（現在の中央町）では、3日、13日、23日に市が開かれた。市日には雑穀、魚類、野菜、果物、小間物などの出店が並んだ

▲電話架設工事（大正12年ころ） 大正12年、山田に初めて電話が架設、使用開始された。これは電話線工事の様子である

本町に電灯がともる

大正六年、大槌水力電気（株）が設立され、そこから配電を受けて山田地方に初めて電灯がともされました。

大正七年の山田町の点灯戸数は五百五十六戸（街灯数四十一灯）、船越村二百四戸（同二十灯）、織笠村九十六戸（同十九灯）、大沢村百十戸（同十四灯）。豊間根村には昭和二年に電灯がともされました。

大正十二年には、山田郵便局が電話交換事務を開始、山田町の電話加入者は百人でした。

▶山田町役場（大正末期）「鐘の名所」といわれた御蔵山上の役場庁舎。時報として鐘を鳴らした

■主な出来事

元号（西暦）	主なできごと
大正６年（1917）	大槌水力電気㈱より配電を受けて山田町に電燈がともる
大正９年（1920）	第１回国勢調査を実施（１町４村の人口13,713人）
大正10年（1921）	国鉄山田線の工事が始まる
大正12年（1923）	山田町に電話が架設
大正13年（1924）	山田町大火事
大正14年（1925）	宮古・山田間を客馬車が運行

▲大浦のイルカの水揚げ（大正２年） 大正２年、大浦地区ではイルカが大漁、地区民総出で捕獲、解体作業に当たった。波打ち際がイルカの血で赤く染まったという

▲山田自動車合名会社（大正12年ころ） 山田自動車合名会社は大正12年ごろに発足。山田―宮古間を約１時間で結ぶ定期自動車を運行した。写真の車はシボレーで、ナンバーの岩６は県内６番目に登録されたことを意味する

▲三本小松道の開削（大正時代） 山田村と織笠村の境の峠は、かつては交通の難所であった。鞭牛和尚の道開削碑があったといわれる。江戸時代の古文書には「坂板峠」などと書かれている

▼蓬莱橋（大正初期） 関口川河口に架け替えられたばかりの蓬莱橋